様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２７ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2014
課題番号：２５５６０１２８

研究課題名（和文）生に関するゆるやかなガバナンスのあり方

研究課題名（英文）Loose Governance of Life

研究代表者
吉澤　剛（Yoshizawa, Go）

大阪大学・医学（系）研究科（研究院）・准教授

研究者番号：１０５２６６７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：再生医療分野を事例に質問紙調査を実施し、研究者自身のコミュニティへの帰属意識のゆるやかさを明らかにしたほか、対面型交渉ゲームを用いて、参加者自身の健康意識や行動変容にどのような影響を及ぼすかについて調査を行い、看護師・保健師による健康指導への利用可能性を検討した。また、Arie Rip氏および福島にかかわる研究者・実務家と社会的空間という概念の展開可能性について議論を交わした。生命や生活における選択や決定、知識や行動について、「綺麗にいかないが、なんとかなっている」状態を「ゆるやか」という言葉で表現し、不確実性や曖昧さ、抜け道を許す形での、生に関する社会と自己の動的ガバナンス論を提唱した。

研究成果の概要（英文）：Conventional governance perspective is formalized, static and restricted to organizational processes and networks, the decision-making in which is based on either libertarian individuals or authoritarian society. In Japanese context, however, as represented by terms like 'seken' and 'kuuki', people often never make a clear decision on but rather deal with an event in a tacit, ad hoc and peer-pressured manner. The event ranges from life-threating to daily. Here, this study proposes a novel concept and theoretical framework of 'loose governance' by challenging the conventional governance perspective. In the sense that the looseness allows uncertainty, ambiguity and loopholes in governance, the concept of loose governance resonates with the recent STS discourse on governance referred to as being anticipatory and mundane, but less with adaptive, reflexive and responsive. The study also sheds light on the methodology to understand dissociation and conflict between public and private selves.

研究分野：科学技術政策

キーワード：世間　空気　あいまいさ　ジレンマ　責任ある研究・イノベーション

１．研究開始当初の背景

生についての包括的な学問的視座として、生の哲学や生権力・生政治、生社会、生資本などが知られているほか、科学技術社会論においては生物医療化論（Clarke 2003）も発展している。ガバナンス論としては政治・行政学において、連携や対話、参加、ネットワークといった接頭詞がつけられた概念化が登場している。こうした新しい《ソフトな》ガバナンス論では、トップダウン型のガバメントに対抗するボトムアップ型のガバナンスという紋切り型の図式を越え、より多様な関係者を交えた中間的媒体を措定する。しかし、いずれもメンバーシップは固定的であり、関係のダイナミズムを記述しこそすれ、各メンバーの認識の多様性や曖昧性、状況依存性を描いたものではない。こうしたガバナンスの見方は組織過程やネットワークに制限されており、限界があるとも指摘されている（Rose 1999）。一方、自己決定論としては科学技術社会論（Epstein 1995）のほか、民主主義論や合理的選択理論、生命倫理学、情報化社会論などにおいて広く論じられているが、社会決定との交錯領域における「ゆるやかな」決定のあり方は議論されていない。

２．研究の目的

本研究は非常に俯瞰的で学際的な視野によって生のガバナンスを理解することを狙いとするが、新奇的ながら短期間の萌芽研究であるため、包括的で完備的な理論構築は難しいとみられる。したがって、まずは生のガバナンスについて、身体、尊厳、アイデンティティなどの観点から、他のガバナンスと異なる特質や「ゆるやかさ」の程度について明らかにする。また、生のガバナンスにおける具体的事例から、それが科学技術の専門性や専門家の決定に強く依存しているとされてきた伝統的な事例（生命の生）と、そうではないとされてきた日常的な事例（生活の生）とを比較して、生のガバナンスを考える上での共通点と相違点を明らかにする。

本研究は、生命や生活における選択や決定、知識や行動について、「綺麗にいかないが、なんとかなっている」状態を「ゆるやか」という言葉で表現し、不確実性や曖昧さ、抜け道を許す形での、生に関する社会と自己の動的ガバナンス論を提唱することを目的とする。

３．研究の方法

（1）事例研究

予防接種の事例では、幅広い社会のアクターや市民のふだんの何気ない行動を探るための調査手法を検討した。生活習慣病予防の事例では、対面型交渉ゲームを用いて、参加者自身の健康意識や行動変容にどのような影響を及ぼすかについて調査を行い、グループインタビューやワークショップを企画・実施し、参加者が日常抱える生活習慣上のジレンマについての発言や態度から質的分析を行い、看護師・保健師による健康指導への利用可能性を検討した。

（2）セミナー・ワークショップ

26年2月に外部研究者を招いたワークショップを開催し、環境保全と公衆衛生、アスベスト健康被害、受動喫煙、規範の社会心理学などのテーマで議論や意見交換を行った。

また、26年5月にはAndrew Pickering氏の講演会を開催し、サイバネティクスを軸とする領域横断的な科学論をめぐって対話を深めた。

さらに26年10月に「ガバナンスにおける社会的空間」セミナーの企画立案・開催協力を行い、Arie Rip氏および福島にかかわる研究者・実務家と社会的空間という概念の展開可能性について議論を交わした。

（3）概念整理・理論的フレームワーク構築

科学技術社会論、公共政策、文化人類学など分野横断的に「生」や「ゆるやかさ」、「ガバナンス」についての理論的考察を深めた。遺伝子組換え作物や生活習慣病予防、予防接種、情報セキュリティ、いじめ、分類など生命・生活に関わる事例を中心に、研究メンバー各自の専門と知見に基づいて「ゆるやかなガバナンス」の概念について整理したものを全員で議論し、精緻化した。専門分野に依拠して先行研究レビューおよび事例研究を進めながら、上記研究者を中心に構成される「生のガバナンス」研究会（およそ毎月開催）において、全員で学際的議論を進めながら概念整理や理論的フレームワークの構築を行った。

４．研究成果

（1）再生医療の事例調査

再生医療分野を事例に質問紙調査を実施し、研究者自身のコミュニティへの帰属意識のゆるやかさを明らかにした。

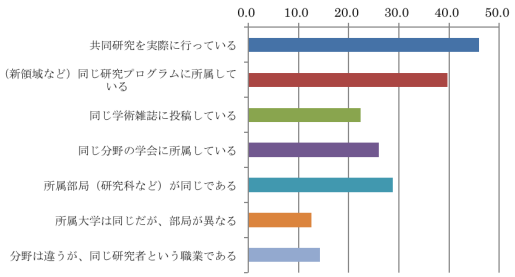
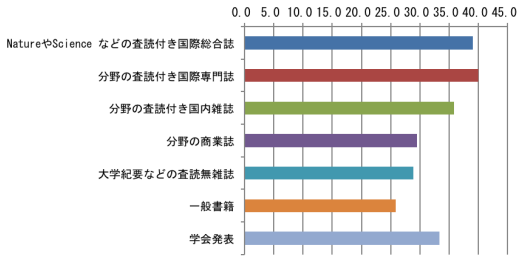


図１：研究者間の距離感に関するイメージ－「関係がかなり近いと感じている」／「関係がやや近いと感じている」回答の割合（%）（全体）

その結果、研究者間の距離感のイメージとしては、「共同研究を実際に行っている」に対する回答が最も多く関係がかなり近いと感じている」／「関係がやや近いと感じている」

回答の割合は 46.0%となった。これは、少数ながらも実際に行った研究者インタビューの傾向とも一致していた。また、「同じ分野の学会に所属している」よりも「所属部局（研究科など）が同じである」回答の方が若干割合として大きいというデータが得られた。

図２：研究発表媒体として「かなり信頼できると思う」／「やや信頼できると思う」回答の割合（%）（全体）



また研究発表媒体に対する信頼度としては、国際的な学術誌において相対的に信頼度が高い傾向が見られた。また学会発表においても、「かなり信頼できると思う」／「やや信頼できると思う」回答が併せて 33.4%と、「分野の査読付き国内雑誌」に次ぐ割合となっている点は興味深い。

（2）ゲーム教材から考える「ゆるやかな意思決定」

生活習慣病予防を目的とした対面型交渉ゲーム、ネゴシエート・バトル（通称ネゴバト）をとりあげ、ゲーム参加者によって展開される対話が、参加者自身の健康意識や行動変容にどのような影響を及ぼすかについてグループインタビュー調査を行った。その結果、対話の根幹となるジレンマには大きく「それができたら、苦労はしない」「わかっちゃいるけれど、できない/やめられない」「人の生活習慣に口出しできない」という 3 パターンがあることがわかった。そこでは健康第一主義の生活を送ることは難しいという一方で、「子供との会話の時間」「プライベートの楽しみの時間」など、生活を彩り豊かにするような要素とのジレンマも含まれていた。

生活習慣は自分の生活態度への理解や周囲の協力なくして予防できるものではない。そのため、保健医療の現場などにおいては、ネゴバトのようなゲームを用いることによって、常に医学的な正解を導き出して行動できることではなく、自分がどのようなジレンマに弱いのかを知ること、加えて医者-患者関係だけではなく、上司-部下、あるいは同僚同士、家族・友人同士との対話において交渉をしていく力を身に付けることが、「ゆるやかなガバナンス」を考えるうえで重要となってくると示唆された。

（3）ガバナンスにおける社会的空間

26 年 10 月には「ガバナンスにおける社会的空間」セミナーでの話題提供や議論を整理した結果、以下の 3 点が課題に挙げられた。

① 社会的空間と既存の制度や空間との接続。Rip 氏の言う「科学のための政策（policy for science）」における社会的空間であれば、制度によってオーソライズされ保護されるが、そうではないボトムアップ的な社会的空間はどこかで制度に担保されたトップダウンの空間と接続されなければならないのではないか。福島の社会的空間で第２段階以降が実現していないのは、空間のルールや境界線をオーソライズ・保護する仕組みがないためのように見える。情報プラットフォームやラウンドテーブルの制度化、あるいは市民会議の町内会や市役所との接続に関わる論点である。

② 社会的空間に参加する人の責任や信頼の所在。参加する人は現在の肩書きを越えられるか、あるいは上手に利用することができるかが鍵になっている。地元コミュニティでの世代間ギャップや地縁という話は、今まで持っている人間関係に引きずられることを示しており、それらから自由な社会的空間の成立の難しさを表している。同様に、社会科学者がどのようにこうした社会的空間に入って研究をすることができるか。「調査公害」と揶揄されるような、被災者の感情を逆なでする研究態度は望ましくない。しかし研究者が研究対象を自由に選択できる状況で「責任ある研究」を掲げることは欺瞞的にも見える。

③ 情報・言論空間における内と外。福島にかかわる研究者の発表では、内と外との震災の語られ方の違いに焦点が当てられた。ここで外での語られ方をどう評価するか。内＝現場では普通に生活しているという事実を外に伝えることで、その訴求力のなさゆえに外から忘れ去られることは良いのか。外ではナショナル・グローバルなスケールでの語りがあるということから、現実を語る場としての内側に対して、大きく理念を語る場、未来に向かう仕組みとしての外側のあり方が問題なのかもしれない。

（4）概念整理

本研究では、自己決定でも社会決定でもないゆるやかな決定に際して「みんな」や「世間」、「空気」といった場が構成する見えざる中間的媒体とそれらに「なじむ」時間という時空間的に漠然とした広がりの重要性を確認した。また、行為や過程ばかりではなく環境としてのガバナンスへの着目と、学術研究ないし社会実践における「ゆるやかなガバナンス」の位置づけの必要性が明らかとなった。

ガバナンスにおけるあいまいさは生そのもののあいまいさにつながっており、そもそ

もガバナンスという概念そのものがあいまいであることの原因にもなっていると考えられる。また、ネットワークとしてのガバナンスという視点を導入することで「ゆるやかなガバナンス」をネットワークを維持するためのガバナンスの一つの方向性として議論した。これによって、契約関係に基づく「トップダウン」や「ボトムアップ」のガバナンス手法はタイトなガバナンスとして理解することができ、相互補完的関係にある「トップダウン」と「ボトムアップ」のどちらが適切かという議論はあまり意味がないと考えられる。

「世間」や「空気」は互酬的・互恵的関係にあり、非互恵的な解放的ケアによって公共世界へのケアの拡大を可能にする。専門家と一般市民との対話や協働も非対称的な関係にありながら互恵性を確保しようとする戦略であり、緩やかな共同性やバッファ距離を保つことで専門家が社会のステークホルダーに対して積極的に《弱い》応答責任を果たしていくことが期待される。

こうして、弱い応答性の重要性、ガバナンスのあいまいさ、ネットワークとしてのガバナンス、研究者自身の属性のあいまいさへの着目、ゆるやかな意思決定におけるジレンマの存在などが明らかとなり、報告書としてまとめるとともに、今後の各分野への研究発展に向けた多様な知見を得た。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 江間　有沙、不健康への誘惑：ゲーミングで生活習慣を考えよう、市民研通信、査読無、24 号、2014、http://archives.shiminkagaku.org/archives/csijnewsletter_024_ema_201404.pdf

② 日比野　愛子、江間　有沙、上田　昌文、菱山　玲子、生活習慣病対策ゲームの開発支援−知の生成をうながすゲーミング・インタラクションに注目して、経営工学会論文誌、査読有、Vol.65、No.3、2014、pp.211-218、http://doi.org/10.11221/jima.65.211

③ 江間　有沙、兵藤　好美、「医学的な視点」と「生活者の視点」間のジレンマと交渉：生活習慣病対策ゲーム（ネゴバト）の看護学生用教材への利用可能性、日本保健医療行動科学会雑誌、査読有、Vol.30、2015

〔学会発表〕（計４件）

① Go Yoshizawa, Individual or institutional? Responsibility and ethics in innovation, AAAS Annual Meeting, Chicago, USA, February 15, 2014

② Go Yoshizawa, Loose governance of life, 4S/ESOCITE Annual Meeting, Buenos Aires, Argentine, August 22, 2014

③ 江間　有沙、ゲーミングを用いて考察する健康意識と対話の変容過程、日本心理学会 2014 公開シンポジウム「教育におけるゲーミング・シミュレーションの応用的転回を探る（3)、同志社大学、2014 年 9 月 11 日

④ 吉澤　剛、大学・学協会の社会的責任論、研究・技術計画学会第 29 回年次学術大会、立命館大学びわこ・くさつキャンパス、2014 年 10 月 19 日

〔図書〕（計１件）

① 吉澤　剛、佐野　亘、見上　公一、標葉　隆馬、江間　有沙、「生のガバナンス」研究会、生に関するゆるやかなガバナンスのあり方、2015、64

〔その他〕
ホームページ等
「生のガバナンス」研究会
https://sites.google.com/site/govoflife/

６．研究組織
(1)研究代表者
吉澤　剛（YOSHIZAWA, Go）
大阪大学・大学院医学系研究科・准教授
研究者番号：１０５２６６７７

(2)研究分担者
標葉　隆馬（SHINEHA, Ryuma）
総合研究大学院大学・先導科学研究科・助教
研究者番号：５０６１１２７４

佐野　亘（SANO, Wataru）
京都大学・人間・環境学研究科・准教授
研究者番号：２０３１０６０９

見上　公一（MIKAMI, Koichi）
総合研究大学院大学・学融合推進センター・助教
研究者番号：６０５８９８３６
（平成 25 年 12 月まで）

江間　有沙（EMA, Arisa）
京都大学・白眉センター・特定助教
研究者番号：３０６３３６８０

(3)連携研究者

三成　寿作（MINARI, Jusaku）
大阪大学・大学院医学系研究科・助教
研究者番号：６０６３５３３２

岡田　健（OKADA, Ken）
大阪大学・大学院医学系研究科・特任研究員
研究者番号：４０６２３７５７
（平成 25 年 9 月まで）

加納　圭（KANO, Kei）
滋賀大学・教育学部・准教授
研究者番号：３０５５５６３６